

学位記番号： 修士第39号
氏名（本籍）： 谷田 恵子（滋賀県）
学位の種類： 修士（看護学）
学位授与年月日： 平成15年3月27日
学位論文題目： 実験的疼痛の閾値に対する芳香の効果

論文内容要旨

手術後の疼痛は患者に身体的、精神的ダメージを与える。その疼痛を緩和することはナースにとって重要な役割の一つであり、その介入に芳香療法を用いることが可能ではないかと考えた。そこで、真性ラベンダーオイルの芳香が疼痛閾値を変化させることが可能か否かを健常者を対象にして検証することと、芳香のリラクゼーション効果を自律神経活動の生理学的指標を用いて捉えることを目的として、準実験研究を行なった。健康な成人女性27名を対象とし、実験群（27回）と対照群（10回）を設けた。実験群は10分間の安静後に疼痛閾値を測定し、その後10分間、自然揮発させた真性ラベンダーオイルの芳香を自然呼吸で吸入し、再度疼痛閾値を測定した。対照群は香りを用いずに同様のスケジュールでそれぞれ測定した。疼痛閾値の測定には、輻射熱により疼痛刺激を与える器械を用い、加温から被験者が痛みを感じた時点までの時間（秒）を疼痛閾値とした。リラクゼーションの効果は、心拍変動を粗視化法でスペクトル解析して算出した副交感神経活動値（PNS）と心拍数（HR）を用いて評価した。被験者のラベンダーの香りに対する好みは、7段階の順位尺度を用いて表し、香りの好みと閾値、自律神経への作用との関連も調べた。その結果、真性ラベンダーオイルの芳香吸入によって疼痛閾値は統計学的に有意に上昇したが、上昇の有無、程度に個人差があった。PNSは芳香吸入により上昇傾向は見られたものの、吸入前と吸入中のPNSには有意な差は認めなかった。一方、HRは実験群でのみ有意な減少を示した。香りの好みと香りの作用との間には、統計学的に有意な相関関係を認めなかったが、実験群では疼痛閾値の上昇率とPNSの上昇率の間には弱い正の相関が見られた。

本研究により、真性ラベンダーオイルの芳香の吸入には疼痛閾値を上昇させる効果があることが確認でき、芳香療法が疼痛緩和の看護介入として有用であることを示唆できた。リラクゼーション効果に関しては、HRではその変化を捉えられた。しかし、PNSでは、その値が実験中の微細な外的、内的刺激の影響を受けていた可能性があり、芳香による身体への影響を明確にはできなかった。また、これらの効果と香りの好みと作用との関係性も明らかにはできなかった。

このように、本研究の意図したところは、芳香の疼痛閾値上昇効果とリラクゼーション効果を明らかにすることであったが、それ以外にも、本実験からは、PNSをリラクゼーションの指標として用いる場合の注意点も明らかにできた。